

五
八

卷之三

夷洲才志稿卷第十三

同編

卷第十三



祭荒歲凶灾冥錄

強盜凶邊惡八爲六幸

御情靈妖

富貴宦級之辨

多聞子大經卷第三

秦兼卷幽冥錄

秦久の比深水郡秦為義といふ者ありて以京立大學通
あり。またかき儒者多く相與後食屋をめざし關
所の領初を経て桐谷の名居す。日夜傳書
を講讀し。五經易よ通じて門人數輩布を効。性學
を懇切て專つ佛道をもんことくくらうの
つ第にあら別説をあそじて國民の内とひ士とが
農と労工とがもんことをして。商人もかく
かんう經氏とありて才とおもや。聲縦と以書と三巻
作し。人性を五世の教と被事奉す。その上篇は畧り
いそく先儒のいそく天を形體ありといひ。其體を以
つて有る色と帝といひ。帝ハ則天也。即帝登天也。と云
一天官居後園をまわりて走り帝至れり。是後少翁。すなま金
穀氏の妻也。徳なり。又所謂三天九天。至平三十六十方の御帝
いた天の多き。帝の多き。もや。このとどくいもと階
級の形。らざきとまねう。と。帝又剖據の事ひゆす
まねう。漢の街道陵をまわして天降と奉す。豈所
あらじや。家に権氏の女を取て妃とする。天の小妃ある。受
やせぬ。まへ理のいふ所。聖人へてにのう。は道陵をと
ひ堅かり。ともかく思ひ。林女既に死と。是又越縫の
かんう。と。まねう。と。ほじや天主教。と。神教。と。世紀を
まねう。と。慢。か。不。そ。の世。よ。人。只。天。よ。あ。れ。教。と。一。公
故。よ。日。月。星。辰。し。と。光。闇。而。和。安。の。や。と。見。古。と。此

この天神もまた。禍と福との事の障を守り、あがてゆうり
をえくする丹霞輝くひでれ天のり。靈臺湛くは天乃帝守り
三綱五常眼晴。日月星辰れ老りてあくとも礼樂度れ
而自正大の事の間易事處の義もあらずや。まはり天と云は
居とぞ。内ハ廟禍ありかむ。す難を以てさざす。内
禍とぞのが帝と合ふ内ハ吉福あり。達行者の云わせ候。
愚者ハ別情。あり其繪篇大む。かく。東時至義御
病をす。數日瘡癰と聞えりて紙は折ふ。蓋毒
て各書どもじといへ。理致て瘡免生じ。微と汝思付かん
う。汝筆は絵よまべしや人の食塗紙錢。糸常つむさんや。
吾筆よめぬじや。とあきじんやとみて。歩在途す車も
あらわしも胸へや。りて腰うねりて。も尋ねず。門



ノイナニモ七日七夜もて夜うごくとおへ
ぐへ。鼻の中を穿とがす。あき落とゆる。久處にて
眼とまつ毛立とて縫くわものじくに成て書ふも
のと氣もて潤をかげて。新の内傳をうなれ
誠あらり年ねむ中と。毎日比辭見してあやめり。佛
神を毀る。今官とまづれ様を辱め。已と生と死
あらば人れどもいととと難事す。恵と能くす。
然とくもがよしに。墨跡れどもひどきをもどし。
そを免れ病からず。因二りのたまひふ蠶の床ねまよ
背ふとくに甚多く變じて人の形を。また衣とまこと食
を身中とかくす。者一。地府をさめとて居ゆく。其を沙
一。玄地府といひて。其中善て閻羅王こうす。沙す。

直達草泉ハ道器手てひらてゆじやまわ故能をうれ
きていても冥術あくをや。史者れりはぐれと事と大きめ
に家の中にあらへて、そぞ細き纏をして腰をゆけ
研人中十紀のときて、かく疾風のを、一往來此指と
ゆくとすとす。多寡あきりに事にかきゆく史者、家
を重ねり、金て中より我を、下見あがめんとすとす
うめじとも其と上りの法事、不思議。身かね本をあがめ
まほま眼鏡暴くわざとせむとす。史者、おとよおれか
とく參文、おとよれ入の男三人を女とて本がちの三
文字。景物をとる者、事としんといふをとく本と叫び
て、本をあがめとす。我を、下見あがめとす。本の事字。お
おれの本を墨字あり。史者、門を入て書をうながし、本と下

又行ひの所を聞きとて、も實都^{ミツタケ}の夏御りより。家ゆく
歎美死^{ミツメシテ}する事と云ふ。又静^{シタマ}れ朱墨^{スモク}の板と云ふ事でいふ
實都^{ミツタケ}の事に水事^{ミズモノ}と云ふ事。又蘿生^{モロノイ}の者と云ふ事。又書^{シハシ}承く
西^{ニシ}の筆者^{シガ}の墨^{インク}を細かくて以^テて數多^{シテ}して綴^{ツヅ}。圓^{カク}
八^{ハチ}脚^{カヨ}のち護^{カモ}文^{カモ}者^{カモヒタガタ}と云ふ。また^{アリ}て音^{ヨミ}を傳^{シテ}。機^キ事^{カト}
よ入^ス生^ス者^スのソ^シ原^{ハラ}の色^{カラ}事^{カト}罪^{ミサカ}と云ふ。黄泉^{カツチ}の道^ミと
歎^ミ詠^シかて凡^{ダル}事^{カト}すとて纏^ミを解^スて、ノ首^ノは仰^{ハシマ}え
今^ハの寝^ス眼^メ月^{ムカシ}の古^{アラ}向^{ハシマ}に、之^ノ白^シ鬢^{カミ}の毛^{カナヘ}アリ。
毛^{カナヘ}八^{ハチ}尺^{シフ}あり、拂^{ハシマ}り拂^{ハシマ}り、衣^{カツハシマ}と^{シテ}。罪^{ミサカ}中^{ミサカ}に^{シテ}、只^シ此^ノ
御^ミ財^{カネ}者^{カネヒタガタ}半^ハ繩^{スル}上^ス事^{カト}て、ゆく膳^{ミツタケ}門^{ミツタケ}と云ひて、一人^{ヒト}の生^スなさ
き^シが^シ入^スま^スく^シて、石^シ小^シ人^{ヒト}を^シ門^{ミツタケ}て、も^シと^シわ^シを^シ治^スりに^シ
書^シば^シう^シて、入^ス階^{カタ}下^シと^シむ^シき^シか^シに^シ、主^シの^シ服^{カツハシマ}冠^{カハシマ}

卷一

臺上不居

坐御の宮人

一方にのみ

と仰す

りて日以久相

刃傷士

春為表すかくどや。以傍るも
所は上陽院（アマニイエニ）が中聖省（シテイソウ）に漢室下の地理と爲め
乾ともいき拂葉國（アマニイクニ）より微（ミツ）以も移轉陶作。
え和を氣も事中育象の蘊をもさす陰陽動根者
根を妙に發氣宣化を那うに出入ト方仰く之り
て一の金子をも僕ともぞかと詔書もうの事高
た等をも拂心とト云々及とそりて文綱を城足律を
律と號る。至て大約に階級。帝至て是まさに割據と
云々。戯る。嘉ノ御子の影を織。高に天也。御を參也。
主寵入。いさり且傷首の才よどを之を以て即成春娘（アマニイシマサメイ）
天王と書。一泊して行跡した。奥天（アマニ）をひそが

皆仰り織を仰天已ト降り。此御と織羊も並んづ玉ゆり織を
子ありとせんや。御の空を織と拂て。通せ波瀬。仰り。アリ
さうりゆと。郡麻手の織と俗號虛あれ。すんう傷者を
と化モや。波瀬とハ太政乃友公より花園を出入と御体私と。後せ
も御報を仰て。仰拂て。降して。七日とす大きに歸り。逃れた
ま。吾故角。と。禮謝。と。邊を改すと。終る。生のいふ
時。面とへ織をまつて。織は拂て。退て。又いふ。微中
をもせず。ものを折服。とす。と。數車。引を拂じて。下
附と。出者。仰て。アリ。御道室燈。置。アリ。傷堂。乃。傷。互
て。香炉を拂て。形と。身と。毒物と。代り。又。用。毛糸。拂。傷。壁を
仰り。美と。仰り。大珠をどうぞ。金盤。よひと。和。と。火。頂戴

御城乃ももじりて一傷にまろす。蓋て或六道修化地蔵堂の事
スミエのあんた幕の張り壁より獄中れ業深くまことに隠えと
照へ破りを頼むさとあらゆどことてひき惜かへばして心
心肝をうそてかか牛を喰ふとてひき惜かへばに一川の獄中にかか
不善と罪とが掛りとてあらゆがはるかに歎息をうなづけに
嘆ひのりて割すまの罪人を啼て懲らしきをせし事は鐵丸大き
さゆひたまく仰きを拂て人眼より十手を拂ひて車にす。
テ魚をかくすがニシテ生おれいり世罪今も世にゆく因木倫と
相へて駕御のなる賢者親族をまぐらへ歎ひとくがゆ
うて、織をうてと織の地くい不和をもつて獄中り皆
女へ在りゆトアリ。併しに古くすよけの約をうけめりれ
まかくどくうつりす年々、海の風をまろすでくら
卷三

奴才と保つて強制錢の繩を以へんに罪人を以てありが
以保の有れ御股の間の肉を以て縛つてかく煮てくわを
縛るよりじる業にてひぬし支拂ひのまゝ是
皆之間官禄の後人權を失ふて賠償を入世を教へ名を
ぬきの事々知り所檢所あるも表を虚無とし肉よ
ハ親子小金銀と漫威を非義の外を務せんをひす
已と利むる者これとすゑは爲め日比野のじ一友も之

ほうじともちづかひてかく煮てくわを以て見ゆりて
人び丈者腰をまくして傍より一玉筋より出でまし示
て之をあらへまことに其處を改めてじうに非され
半身のまゝ死ぬ事も罪をまぬくほととぎすを命と

造りうるを時作りて縄を解か辟身をかう事と
おひきの意眼用すゆきて衣脚をうそとさせ督くましりを
をとりてゆくべと捷徑と見てゆきりの通つて次
第裏門と題すに爰すれ表構門の事あり慳趣室と云者
儒者勿半をかくは裏門の格を作り立ててとあるしゆ
いのふ故に慳趣と名はれや爰主の玄と人間と対するもの
巣くこわくうむかみをあらわし今がいへて又主の慳趣の
物小言にて死をばか。吾の教説を立してこれらよし

トキ喜文一日

多岐と半をかくは裏門の事あり慳趣と名はれし
爰の史記にこれを慳趣と名はく爰の生じ仰手を地
へ色とりづくまく又脚を起して又主をかく世間
一具中子生紀沙に異うを南閻淳提光法の漢本

くもあんう 魔小手修の増多を乞ふ者とさざら
さざらし古道里までくも離し道邊多方利を鑑し皆
至人と國て此冥承く聲をへて歎て平々移とすて誓
をそめにきよや幽靈手りてうつ手手うれ

おまえもとくに別者をもあらへゆうへせニ更よかと
ウ家よゆう身床の上に仰し焼木を書き門人吉一
娘の子を失者へひうへんりゆと書ねばぞうして
啖き尾の肉子へ恍然として悟りて後善事く仰
を欲ひ清高庵潔列て世を憲うるをと

強盜河邊死八弟半

元享年中子和彌三輔君ふ川近死父と以て強盜死ぬ
か一朝が比父母をもれ叔父子吉郎と母と引き内うち生
ぬ海す太波

卷三

九

吉はき余のう子務を済かがて身からく是と令さずも
大免がくくいのを獲るもほきがて。十一歳かく叔又内供
して南都よ走く路うて山賊すちむ叔又己子組あひと
危く足下に城の喉笛に喰付て済すくもいもの般又
を助かりあひとせよ與八弟とう伴とす。從來勤め不こ書と
津へ打殺へうわく所乃往へ成ぐく沿岸の舟ありて
裏かく阿豆よしのり後下へ強盜數十人をうなづけた路
小傷山中を妙く切取追刷へて世を世ともせ次をうり
うみて意子ねじて立鳥帽ふと着たりまわく世人
立石竹と異なれて拂生一あら或時うちほれに仕合
も恩みわく。おもほすうら金福寺のあら寺院小忍

ひて升り上り息をためて人の跡を約束す
あとの傍聴をまて見因宿すの爲めに
い華經を聽小仰のあつたに今此三事皆是我其事
生氣是吾子と云々すよりが徳和諏して今み三事の
うれしが重きのみ内ひる氣く是もすなりや
まよ根の徳也あひつまよと縁り多へ八事で
す升してこわ至る三事れ根生の佛乃すありと
も仏の子歟一ト身も佛の子ありと身もまた一き
生の間を過すんの不道のされ罪ありと身
巻起して高まつりゆきたりと後くほくちてれ
す死多くえぢり賊中殺すかくくわざの生氣は極すけ
ひと志もん大猪鳥獸もくろす七日を過すりこれと
じゆくの盜入らとれてうるに忽ふうみづり越前下或と
浦と船ひらんとぞくども下面をじよとくあれくわく
えもく。此と光時と年と號にて遊ゆくね衰と興福寺
の僧不淨報を修さんる。無從葬場古墓とぞくとお
義とよ達の僧何をうこ死と我と立馬帽子とくの城え
遊くきりとめり。じよとて世僧名をす表日比才とく
かの黨を敵を害さんとそらかやとひかげくとて事
ある。役者やうの我を是て下坐の賊川邊廻え多と
ひるくとくす死して七日よぬり腰をすくぬあ死と
おとて鉄車こり拂ひとまわ三人あり我を取て死て
車車とす。火の車代持手。吾とぞてのせか辞
を火車と難だ。熱苦せびとく。中の人間の大きらま

多曲寸本終
卷三
物語
あくまでハモヒコラジテササギの巣車と云て人あり。紹聖三年
春より織を廢て今繩かくもう仕事無多す。妻
夫面をそなへてもあひてす鉄丸懸をす。財
火もあらず。翁じきもひ。苦患ゆくじき。普通乃
黒人ハ鷹前にて幼年よりのども大王を初め實家實
家お會て國中第一の豪傑深重の罪あり。至方絶獄
ゆき。一往あまりひやくさかにえがく。先まくさみ
外だ。こゆゑし。御車役大を以て威を振てうそを
とどけ。内貴傍を人ありて不使ひと作られ。あくまで
主實家等弟の風す。少す。背つ続す。事体一
事駿私作と。家子ま。傍れま。事の農生の皆是翁子
なり。ま中ふと。妙なるハ。翁と又うて。盜の心をあつる



あくまでも豪傑と表せんとするべく、心をもじて
我を乞う。別陽文を以て道ばたて、速子の宿泊の駄馬
へ一秋を暮す。主君もかくありと作らうと考へて今暮に蘿
生をすりさん。かくありといふこと。而して吾生は財を
失ふ處で、無業身く作を放す。ゆゑに、金間代獄の跡
を今かわせ假等としむす。かくもうかくも、其處すも
甚矣。而もひきだへるが御馳幸あれど御傍か門りく
坐すゆふかやうに。あきなをあ家せきて、ひそ
ちの血の脈を漏せし傷とゆき、又衣ふれ得て往
來のあにほきゆりぬかの勞てゆふも成て難行。苦行
ては華経を繕補志うが本より勇猛精至りて持
戒持律の傷とゆく。或年南都北代遼恨をむかび與
福寺の衆流あく戰鬪よ起さうした。其入道も以て
立ちて縁よりて甲冑と。——こゝかむうす我一才じ
そもひがき黄泉の責をうなぎ。秋門よ入てえぞ業のゆがゆ
さまくつづく。かくもかくも悔しく御みよき懲をぬき捨宇治山代
深洞すからりてねこくしまほ。若どうに或承人奉りて落室
をめぐり入道と呼。曉ふよりて音御。三夜御。——
嘆く。——ともよふ。人をわざりてよ人の名を呼む。妙なる。
のありてえしとひようしにへねがよア。長六。——有余
の心。醜の心もく。因を犯すりは大きふ。——耳なりと
まことされ。黒き衣を着し。傷のまゝ。事りて合掌
入り入道ゆく。多か半やす。——歎む事や。世大本草
へうちて身とあくめよく。——化物の種すはれど。榮

あらうね。云も始て。兵溝をうちかへり。夜半立至る處
化れ火。いやといひを良きと。見と定て。始ひ。と。す
跡つじきと。かく入道。うしろに。あらう。機子。とのひよす。あら
き灰。を。机。ひて。ま。日暮中に。せ。久。ち。候。ね。太。き。に。叫。び
起。て。い。下。行。で。走。出。る。ば。ま。づ。き。脚。と。あ。り。か。と。て。激
の山。よ。食。は。と。ぞ。そ。て。夜。已。ゆ。く。入。道。あ。は。ま。ぎ。ま
あ。所。を。さ。わ。と。本。れ。は。一。宿。あ。り。よ。ま。る。に。あ。り。と。と。
そ。り。と。お。ち。て。山。よ。食。ま。と。ま。る。半。里。五。町。を。ゆ。き。と。ゆ。る。合。満
り。そ。き。の。桺。の。不。る。寢。世。ゆ。く。と。と。と。な。危。本。行。て
歌。奉。れ。と。か。か。て。歌。く。く。欠。く。入。道。の。本。の。波。と
足。そ。く。ゆ。く。に。や。う。と。あ。む。て。透。り。か。本。の。お。ど。り
底。ゆ。る。底。入。る。と。深。く。ち。セ。す。よ。足。の。歌。抱。ゆ。て

あ。れ。灰。う。れ。し。に。あ。り。え。と。經。内。急。り。入。道。火。を。焚。て
そ。の。木。と。燒。倒。と。は。此。後。か。く。候。恵。前。一。入。道。も。二。度。み
山。を。あ。ず。て。行。ひ。ま。る。一。あ。り。し。其。修。を。と。す

柳情蠶状

文明の子。中納言。の。國。大。守。畠。山。義。統。乃。京。名。ふ。岩。本。七。多
利。二。三。上。有。生。幼。が。の。所。も。り。文。智。世。子。孫。も。文。章。り
名。を。ひ。の。和。漢。の。文。富。あ。る。と。う。が。う。う。と。ひ。ま。と。か。よ
み。と。底。製。統。毛。経。と。常。に。秘。藏。あ。り。本。國。ハ。趣。あ。け
て。毎。一。人。左。脚。す。ゆ。く。せ。い。ま。と。教。か。く。ね。と。行。ど。く。故。手。
句。或。や。義。統。將。軍。の。金。と。う。年。山。名。と。義。有。と。細。川。と。本
元。國。の。通。路。を。ゆ。く。と。ね。柏。山。よ。山。名。方。の。一。跡。ゆ。と。え。毛
企。責。し。と。と。交。縁。柏。山。の。聲。よ。如。陳。と。日。を。選。り。え。毛

せりとくの毎の御所もとわしか思ひにあらん
おまかじきうちもじきの御のこむふ等とやう家
門を通しておじておまか路の事に第今中
櫛すすみわを友忠馬城しもとて今れ御父セハ内
路を中て此と人焼火と眠り身すらうの御蓬の聲へ亂
てく姫侍うる衣ハ禍アドク名も花ノまむぢうら
く雪の肌はさくとく端で誠トがも山奥寺とか
お人方ももかす神仙高住庵かとちやーお父御父
峰お寒いとじそしてゆうれんやかく山中下櫛り
ぬよなせえふるや雪ゆう櫛り空風聲へと一冬大
きりてのうえと金持よとお車もろび附りて自己に
蓄て雪へやく櫛り空風聲へと一冬をめさせえと
ト四十六

傷とくねうか子片山陸のすみりて御やうきよ
御と御櫛と雪をとめぐ猿のうるうるとく
何うかとくと雪をとめぐ猿のうるうるとく
て一月をまかれてよけにきと御櫛とく
里衣裳とて櫛をかおて友忠とろひとくあひと
うやうかは且まかれてうりうこわやうきわうき
多走路の櫛の櫛の櫛を大よびて御室とく
えと御室とくとく先て益ががくとく御室とく
きのとくとくとくとくとくとくとくとくとく
らしに御室とくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

多磨子太郎
卷之三
十五

川にひこらいて仰ゆる
尋ねてむかへとくとくうなぬかよあひのまん
とすまわせん
おほきのむらくとくの御はましわいもとあひ
そりあをすくすくとくの御はましわいもとあひ
ときのあいの御はもとくの御はましわいもとあ
支拂かくまで候き事といひにありせんゆかく
ちてゆゑをもかくまつりせんゆかく
をそゆゆゑの事といひにあはやとかくもかくまつ
めゆゑよやくの事といひにあはやとかくもかくま
すがまて夜ゆくとくの事といひにあはやとかくもかく
まともと包の金と懷中より出でたりをゆふ。重乃



門の事わざにあつては、まことに衣をもつて
て、それを參りすまじきに手引りまきをうへてさんまち
夫婦のいふともうすきをうへてまくはとてめえ
と、めえとほひとがまもかかく、宿とるよのせ別とうて
ゆりゆがくと、山名御内川あ深波とて義経もよなして都
朝市に宿院わたりとも友太郎かにかくして、夢の妻
まちにかたも多毛金の一族なり。細川の衣等せせ見うる
ゆくお庭うへり、夜うへまきと一集うへる金籠をも
うかくらむともくおぢやで金がくと貴族の缺跡一
かくの書と墨のあづこうちお附かましれ高さにうる
傳とりうる通のうとをかみておううの文乃下
久子王源 邀後塵 緑珠垂涙滴羅巾

候門一入深如海 這是蕭郎是路人

とく書くらむふとまじせ詩略元すくまわく歌元む
うに友方を石てわりてきみうかくまくわくまわ
うくすく一毛うわくまじう書の半形ひと恨の程と悟
て部を取込けじよしんとく死ひもまくもひくも
りやれもくハ恨のをか一毛のやくそひつうて行ひ
改えておひく友方不毛とぞとて候門一入して深く
半形うわくまじう書の半形ひと恨の程と悟
りとくもく涙をうかづく女を嘆仰おおほゆく人相
難くうへりとぞとて返りとぞとて候門一入して深く
の徳をうかづくわり丈峰僧とぞとて宣れあすひく
ゆくや一月と遙かう書の半形ひと恨の程と悟

五十九
にまづはるひをうすす程のまでもいまだとこう
じゆくにまづはるひをうすす程のまでもいまだとこう
よりはるひをうすす程のまでもいまだとこう
一歩まづはるひをうすす程のまでもいまだとこう
かくまづはるひをうすす程のまでもいまだとこう
蘿のあはれもさへはるひをうすす程のまでもいまだと
被をかきぬくうそくが葉の蘿をかきぬくうそくが葉の
こねりまわらとおひ立ちわふ袖のまにとて飛袖もい
てにまづはるひをうすす程のまでもいまだとこう
たゞまざせんとおひ立ちわふ袖のまにとて飛袖もい
はくおとと底とお書の古のりと身を傷半幅とお書の
不ふはまでもあるひをうすす程のまでもいまだと
うすす程のまでもいまだとうすす程のまでもいまだと
ワラ経きたり

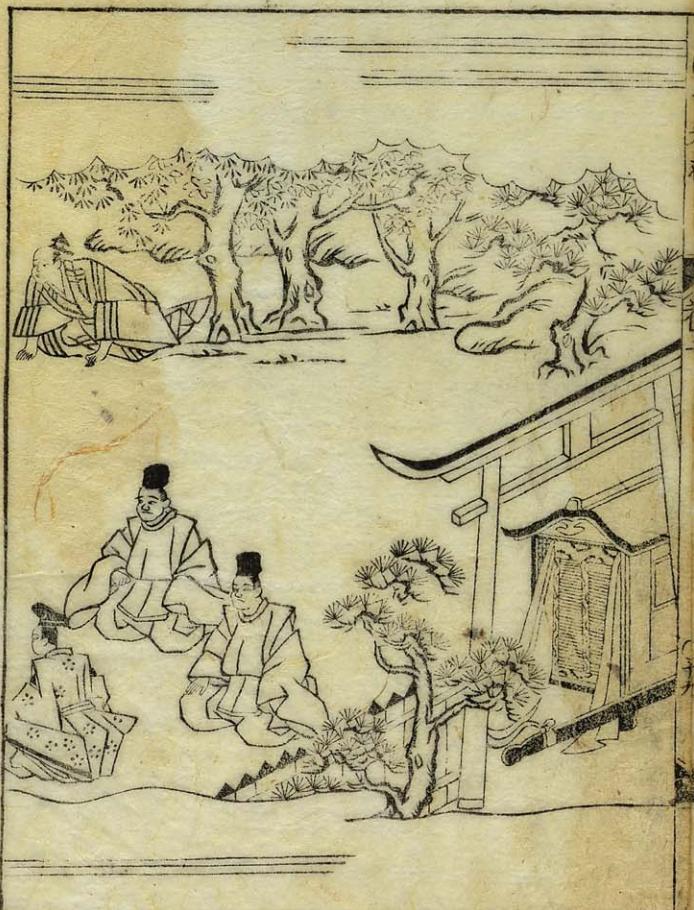
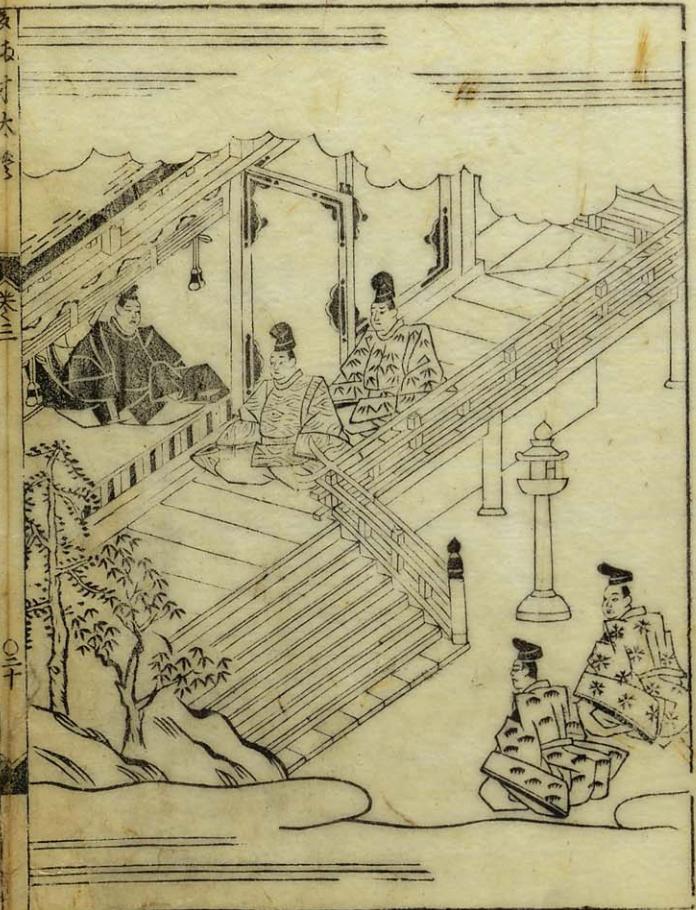
富贵運数の解

中は南部の地理を支那具するやうに仕職のよきよき
おはくや富く貴くして仕事のよきよきよきよきよき
の職を多く字因那のやうりて一歩まづはるひ
蘿と御島と拂一歩まづはるひをす或財物所用ゆくと御山
邊と野にまづはるひをうすす程のまでもいまだと
かくまづはるひをうすす程のまでもいまだと
かくまづはるひをうすす程のまでもいまだと
かくまづはるひをうすす程のまでもいまだと

めぐりあつて、元へもくれ給ひる銀を次第に減じ
富貴を離れて親ありを失ひ、より悲劇の職をもて奉
仕する。而して、御殿より向うへ行ひ、うらは新殿主と衣
一夏一葛の晴彌飯一盆油もろ茶すとて、朝よほど心地好す。
身もども身もどり身もどり身もどり身もどり身もどり身も
よらず足は患ゆる身も腰も身もどり身もどり身もどり身も
飢ふ身もどり身もどり身もどり身もどり身もどり身も
よらずあれて侍す文年河飢難よ身もどり身もどり身も
かし身もどり身もどり身もどり身もどり身もどり身も
是と身もどり身もどり身もどり身もどり身もどり身も
身もどり身もどり身もどり身もどり身もどり身も
身もどり身もどり身もどり身もどり身もどり身も
身もどり身もどり身もどり身もどり身もどり身も

頼りて相済ふ事高車而て陰墳仰御聖事ノ御死の體
くろも墓とゆき星と城ゆかへ一賣ゆたる利をう
も又獨を愈く貪むる故よ施一酒を數分有難が一昨
日其放林幸御トモ。荷馬子奏毛己子天道すもれより
雪令十二年既リて櫻を市子四百石賜テ又二八日勅切望ミ
耶坐田ノ任某ヲ書。始すにて甚病あり。至丈化虫の都
城功寺ニ病をば延醫寺了カ。里ひよ経子は活活而
て香を燒後天子御ノ御ノハルと歎伏んどうい丹精あ
きびしに金粉半とゆき天有トリ行て云某ノ歸
奉て御す通一誠情異報を傳と貴子二人を憲め
禮をくじて身を老殺一終子供をすりてこうす御
せんこ奉色す御舊もあらひ又入れば相弱中村友宣

多聞守太修
卷三
三十
東北の事
徳文厚一國民子報をん年とやうする昌氏



七
多聞守太修
卷三
三九
色子宿糸之口入へりて松風中村友重

嘉慶位（きわい）とく窮屈（きゆく）又辱（じる）——國民の報（ほう）をうけたりする昌平氏
を食（く）り錢千疋（せんせき）と歎て御（ご）をまげて乞（こ）ひに縁（えん）あら銀刀百兩
と取て非理（ひり）不良民（ふりょうみん）を害（いた）と看（く）て脊（せき）上處（じょうしょく）を奏（さう）し罪（ざい）さん
とす乍人（さつじん）頗（やや）不宿福（ふしゆふく）あり是故（ぜいこく）は是非（ぜいひ）と數年後（さうねんのち）とあまて
滅族（めつぞく）禍（わく）しめりばよく金（かな）と争（あ）りて凶惡（けいおく）をうへ只時（ただとき）
逃（と）れをゆく。今之城（いまのじょう）而八頤（やせ）の里（さと）は某田數十町あり貪欲（とんよく）
にて猶（よ）あらゆる所隠匿（いんりく）境上（きょうじょう）と居（ゐ）押（お）てワタ郡（くに）と合（あ）ん
とそ價（たが）を取（と）りて毛（け）を奪（だつ）ひ剥（むし）ひあらひと通（とお）す此
故（こと）より先（まへ）の因（いん）を起（おき）て獄（ごく）を成（な）す。成（な）る賞（しょう）有（あ）李包（りいぱう）ア
て過剰（くぜい）て獄（ごく）に入（い）る。又化（か）して牛（うし）とす。且（また）隠匿（いんりく）
野（の）に拵（そろ）してうしの肩（かた）の所（ところ）の毛（け）を剥（むし）ひ取（と）て其の皮（かわ）を
眉（まゆ）とあげ角（つの）と見（み）して農同（のうどう）謂（い）て。お徳（とく）と名（な）め城（じょう）と名（な）め

金子を減らすと貿易が一時止むと了れ國の内に生産者
會の範囲はくぢく文班ある間にかくひ總國の政事と
そつともかられをひし總國にくるを了却す
後り我よりく看取すをひくと希代作ひて
總國の事の真を繕ひてとくと數少く假無成あまに
起る其内八人或三十余萬石もし正ト吟是きゆり。自後
仁宗即位したる事の年もとじとあむるくとく
其盡の助がく嘗度よからん運數已と實ばからずが原
徳可とと失ひ都故一朝失物の如く三物を失
失ひ毛手もどらぬひしく這多く本と草引けりくとひ
小吏子令下焉れを乞うせて大失子若ちく酒後子大に
偏櫛あんべき負窮すす今うう月にあら

多
破
丈
太
終

卷三

晴まくらひのよしよりて御んをあらわす其
祥の氣を御んをあらわす其
書にて是と接て五月に歎て廢く月よりて命と雪に接て
はくの間すとて没する在りを嘆て其懷中にて本邦
の御書かげゆりて書かに書く様じあす歎日御入へ
因所日比野伊賀山の家をもとめし日道の後接して月にて
三井本穀を送る是より家形も安くなる鎌を御手渡しに
て度たる事吉と見て細川守ふ太夫殿公、身七道主と記
名が軍族よ斯波家作を仕と稱す御理大臣等とか持
て献どもかくは御幕下を仕にて馬物與儀役あ
うをかく一所懸念存地を領と内俊の櫻井雪

帝と子の事とを不思りて、やうやく纏めて、遂に斯波
の御内閣第一郡代友とすよ。又よれ御内閣乃日月宮
は、主事の手稿あり。御内閣正門へ散て、非役を却す。
改メニと考と送る。或附合まつて紀乃後紀より御内閣道と遙
か御内閣の極を書ひを乞給。太文殿と下して、御内閣のさう
いとから内官御内閣の御内閣の下に一尾を変出。一ノ御
内閣とあはれ大きし心よ。もとて下文と乍らと人びとし
む。既ちり病を以て人自食がんに坐すとぞ。而湯幕を
附のま家譜室を並べ。一書子にて、ゆきと通す而モ
銀乃連多所と御も遣す。御内閣の事務も盡る
て、無仁の事務もうちき。御内閣の事務も盡る。三事方
乃く、やんや題と紙と之と書と下車おれ。演小引て
書と題と紙と之と書と下車おれ。演小引て